

宇宙玩具 『アウト・オブ・コントロール』についての覚書 The Note of TACO“OUT OF CONTROL”

角田達朗
Tatsuo SUMIDA

キーワード：演劇、公演、創作

2019年12月、筆者を代表とする演劇企画集団・宇宙玩具(TACO)は『アウト・オブ・コントロール』と題する公演を行った。この公演は「演劇創作作品の上演における表現方法の研究」という研究課題を掲げて本学の研究助成を受けた。本稿は、この研究課題のための脚本執筆を振り返り、所見を記すものである。

*

公演の宣伝チラシに載せる案内文に以下のように書いた。

来年はいよいよオリンピック・イヤーですね。36年ぶり二度目の東京での開催ということで、さぞかし盛り上がることでしょう。報道各社がこぞってスポンサーとなる大翼賛体制のもと、連日連夜、勝ったの負けたのが画面紙面を賑わせ、人々は一喜一憂をめまぐるしく繰り返すことでしょう。そんな狂騒のうちに、五輪誘致のためにこの国の首相が「福島の水は完全にアンダー・コントロール」と世界に向かって大ウソを言い放ったことも、施設整備のために資材や作業員を東京とその周辺に集中させて被災地の復興を後回しにしたことも、すべて忘却の彼方へと押し流されて行くのでしょうか。

今回私共がお送りするのは、東日本大震災の翌年に上演した『帰り道のない』の改訂版です。『帰り道—』は、私が震災、とりわけ原発事故から受けた衝撃、というか、モヤモヤとしたやるせないものを何とか形にしようとして書いたものでした。あれから7年——。あの時のあのモヤモヤを忘れないために、オリンピック・イヤーの直前に改めて上演しようと思いますここに記した通り、『アウト・オブ・コントロール』は2012年に上演した『帰り道のない』の全面改訂版である。言うまでもなくアウト・オブ・コントロールはアンダー・コントロールの反対の意味である。そして、これも上記の通り、『アウト・オブ・コントロール』は『帰り道のない』から引き続き、原発事故に対するモヤモヤとしたやるせない思いを演劇として形象化するものであった。

まず、その「モヤモヤとしたやるせないもの」について述べておこう。

私が原発事故をモチーフとする劇を作ることを決めた動機は、大別して二つの要因からなる。

第一に、原発事故に非常に大きな衝撃を受けたことである。ただし、それは事故の激甚さもさ

ることながら、自分自身の思考に関することの方が私にとっては重大だった。

私は「原発は絶対安全」という類の政治宣伝を真に受けたことはなかった。人間のすることにミスやアクシデントはつきもの、という一般常識的な認識を原発に対しても持っていた。例えば、自動車の安全性能をどれだけ高めても事故を皆無にすることはできない。製造過程においても運転においても点検整備においても人的ミスは起こるし、アクシデントに見舞われることもある。原発の「安全性」についても全く同じことが言えると、福島事故以前から考えていた。

しかし、その一方で、日本でチェルノブイリ級の事故が起こるとは想像すらしていなかった。まさに「想定外」だったのだ。原発で事故が起こったという報道に接した当初、私が思ったのは「最悪でもスリーマイル級止まりだろう」ということだった。それは自由主義経済圏と共産圏では技術レベルが違うはずだという思い込みがあったからであり、換言すれば、自由主義信仰とでも言うべきものに自分も囚われていたということである。事故の甚大さが明らかになるにつれ、私はひどく動揺し、そして、自分が固定観念に支配されていたことを認めざるを得なくなった。自動車死亡事故まで引き起こすことを考えれば、原発がどれほどひどい事故を起こしても不思議は無いはずなのに、私はそうは考えてこなかった。私がそれまで原発に対して持っていた認識は、「原発が絶対に安全なんてことはない。しかし、ひどい事故は起こらない」という奇妙にねじれたものだったのである。果たしてそのねじれは、現実に原発事故が起こらなければ自覚する余地の無いことだったのか。そうではない、と思われてならなかった。

第二に、事故を契機として盛んに飛び交った無数の原発論、中でも原発容認論の多くにどうしようもない息苦しさを感じたことである。事故発生当初は「それでも安全」という言説がよく見受けられたが、事故の甚大さがしだいに明らかになるにつれて、「それでも必要」という論調が目につくようになった。その変化は、ダム建設の目的が利水からいつの間にか治水にすり変わってしまうのと同じで、初めに容認ありきなのだとしか思えなかった。

「原発のコストは事故賠償を算入しても火力発電より割安」という意見もあった。その「コスト」の中に、地元へ交付金等として支払われる原発立地の「見返り」や、「安全性の啓発」なるものに費やされる宣伝などの費用が算入されているとは思えなかった。また、その「事故賠償」に、風評や差別による無形の被害や、将来現れるかもしれない健康被害が考慮されているとも思えなかった。そもそもそれらは計量困難なものなのだから。日本だけでなく、近隣の韓国や台湾でも他国からの観光客が減少したという報道もあった。トバッチリとしか言いようがないが、それもまた被害に違いない。このような数限り無い被害に対して、もし仮にすべて損害補償するとしたら、おそらく東京電力どころか日本国が破産するほどの金額になることだろう。

「原発は自動車よりも低リスク」と主張する者も少なくなかった。しかし、リスクにも実に様々なものがある。避難生活を余儀なくされるリスク、汚染で産業が直接打撃を受けるリスク、原発の近くから遠くに転出した人々が差別されるリスク、風評によって安全な食品まで売れなくなるリスク、海外から日本に観光客が来なくなるリスクなどなど。それらをどうやって数量化すれば自動車事故と比較可能になるのか。「風評被害は原発が悪いわけじゃない」と言う者もいた。だが、

原子力だからこそ、そういうリスクがあるのも事実である。自動車事故なら、そんな風評は立たないのだから。原子力そのものが悪いのか、人の心が悪いのかという議論は、リスクの軽重を比較する上では意味がない。「現に原発事故では一人の死者も出ていない」と断言する者たちもいた。その時点ではまだ「原発関連死」の概念は確立していなかったが、すでに原発事故のせいで廃業に追い込まれて自ら命を絶った者はいたのである。

「原発を止めたら経済が衰退する」という類の話、中でも「経済が衰退すると真っ先に困窮するのは弱者だ」という言説には、人質を盾に同意を強要されている気がした。脱原発論を批判する人の中には「経済に道徳を持ち込むなんてナンセンス」とハッキリ言う人もいた。もはや「人間は経済の奴隷」と潔く認めているようで、いつそすがすがしいくらいだが、それなら企業倫理というものには何の意味もないことになるのか。要するに経済はただひたすら競争に明け暮れる世界で、そこでは「敗北イコール衰退イコール破滅」という図式が出来上がってしまっているようだった。しかし、資本主義経済には恐慌という突然の破綻やデフレスパイラルという蟻地獄的な潰滅の危機がなぜか必ず訪れる。だから、「破滅」に追いつかれないように、ひたすら成長路線を走り続けなければならない。地震大国でありながら54基もの原子炉を建て並べ、甚大事故が起こっても事故の検証も防災設備の整備も済まないまま原発を再稼動する。これとてやはり、敗北という名の「破滅」に追いつかれないためには走り続けるしかない、と思われているからである。

敗北への恐怖が先行し、論理は後から追いかけている。そう思いながらも、自分がその恐怖の外側で生きられる自信は持てなかった。

以上の二つが私の中にどうにも晴れないモヤモヤを生み出した要因だった。それで私は原発事故を最も主要なモチーフとしつつ、経済競争をも射程に入れる劇として『帰り道のない』を書いたのだった。

*

私は今「原発事故を最も主要なモチーフとし」と書いたが、これは必ずしも精確な表現ではないかもしれない。『帰り道のない』には原発は登場しない。一言の言及すらないのである。

現実をどれだけ忠実に写し取れるかに価値を置くつもりは最初から無かった。その種の価値を最優先するなら、創作よりもドキュメンタリーの方が説得力があるだろう。被災に関する情報は当時からマスメディアが盛んに取り上げていたし、今後ノンフィクションライターによってすぐれたドキュメンタリーが書かれることもあるはずだ。事実にしっかり取材したものの方が、私ごときの想像よりよほど価値があるに違いない。

私が形象化したいのは自分の中のモヤモヤだった。言い換えれば、原発事故によって引き起こされた動揺と困惑だった。それを描くためには、原発事故との因果関係に触れないわけにはいかないが、原発事故そのものに触れる必要はないように思えたのである。私は原発事故に関して、更に言えば地震や津波に関しても被害者ではない。原発事故そのものについて直接的に語ることがそれ自体において説得力を持つような立場に立つてはいないのだ。

私は自分の中のモヤモヤを演劇として形象化したいと思っていた。そして、自分がそのように

して虚構を欲することが興味深く思えてもいた。そうである以上、原発事故という現実を扱いながら、どこまで虚構に徹することができるかを試してみるのが、私にとっては前向きな選択だったのである。

そこで、原発事故を彷彿とさせる架空の設定を採用することにした。その眼目は放射能を「タリララン」という架空の新エネルギーに置き換えることだった。これに「多利羅理卵」と漢字を当て、「人類に多大な利益をもたらし、あらゆる摂理を網羅する、無限の可能性を秘めたエネルギーという意味を込めた命名」という、もっともらしい理屈を付けた。劇の主体はおのずと、この新エネルギーを発見し開発し命名し、その使用を推進する架空の人々に決まった。更に、虚構を作るという私自身のこだわりを明確にするために、多利羅理卵に汚染され変質する世界を、現実世界ではなく虚構世界にした。多利羅理卵の過剰なエネルギーによって虚構世界の秩序が狂い、別の虚構世界へと変換されていくというメタフィクションにしたのである。

*

『帰り道のない』から『アウト・オブ・コントロール』への改訂の主眼は、二次創作をやめることだった。『帰り道のない』は様々な既存のコンテンツを踏まえた二次創作作品だったのである。これもまた虚構へのこだわりを明確化するためだったのだが、こうした作品の常として、一次作品を知っている観客にはよく理解され歓迎もされるが、一次作品を知らない観客には理解が難しくなってしまう。そのことは観客アンケートからはっきり見て取れた。この点を重く見て、『アウト・オブ・コントロール』ではあらゆる観客に同じように開かれた上演となるよう、二次創作をやめたのである。

二次創作作品はストーリー展開においても一次作品のイメージから影響を受けるから、一度二次創作として書いた戯曲をそうでないように書き改めるためには、ストーリーの変更も余儀なくされる。しかし、今回の改訂はそれが苦痛ではなかった。むしろ『帰り道のない』に潜在していたもう一つの可能性を発掘するかのようであり、思いのほか興味深い作業だった。

一つ懸念されたのは、元々二次創作であった戯曲を二次創作でないように書き改めた結果、二次創作風一次創作とでも言うべきものになって、あらゆる観客にとって回りくどく理解しづらいものになってしまうのではないかということだった。それが杞憂に終わったことは、今回もやはり観客アンケートからはっきり見て取れた。